

02-25

入院支援系の現状と課題

那須赤十字病院 地域医療福祉連携課

○^{わかい きょうこ}若井 京子、手塚美恵子、野中 早苗、黒田 悦子、大橋 加代、松本 美穂、鈴木鼓珠枝、小林 幸子

患者サポートセンターは質の高いサービスの提供を目的に2009.4に開設された。入院支援係は入院が決定した時点から、患者・家族が安心して入院でき、安全に入院目的を果たせるよう支援している。その運用の実態を報告する。患者サポートセンターは、患者サービスと看護師の業務整理を目的とし、入院支援を中心に看護部に組織され、2010.4より退院支援看護師1名を専従とし、入退院支援係として、地域医療福祉連携課内に位置づけられた。2013.4現在、患者サポートセンターの役割を拡大し、入院支援係として師長1名、看護師5名（常勤1名、非常勤5名）、退院支援係は看護師2名（常勤）、電話相談・正面トリアージ担当師長1名が配属された。福祉連携係（MSW・事務）は同一組織内であり、訪問看護ステーションも同室に配置し連携が図りやすく、入院時から退院支援に関する体制がある。3月の入院患者は683人（救急病棟・ICU入院を除く）で、入院支援係が情報収集してからの入院は397人、約58%である。予定・当日入院を含む患者の情報収集と入院費用や病室の説明、時には悩みや苦情なども聴取している。情報収集は正面玄関左側の多目的に使用する個室・10室である。情報収集後に電子カルテに入力し、場合により入院予定病棟スタッフへ口頭で伝達している。産科では妊娠36週前後の診察時に、入院費用や手続きの説明・病棟の見学・情報収集を行い、入院する様にしている。患者サポートセンターは外来に近い場所で、看護師が落ち着いた環境で細かい事も聞く事ができ、患者からは入院前に話が聞け、不安を解消できたとの意見が聞かれている。病棟は入院時の情報収集に掛かる時間を、他の看護業務にかけられる。今後も病棟や外来と連携し、入院から退院まで質の高いサービスの提供をしたい。

02-27

急性期看護補助体制加算取得の現状と課題

京都第一赤十字病院 看護部

○^{なかの れいこ}中野 玲子、出井まち子、岩坪 祥子、藤本 嘉子、安堂智香子、竹下 敦子、高久 雅美

【目的】派遣による看護補助者を増員し、平成24年10月より25対1配置5割以上の加算を取得している。派遣職員の定着が難しい状況はあるが、現場ではチームの一員として看護業務を補助する役割を果たしている。今回看護補助者の実施している業務の実態と看護師の負担軽減の効果を明らかにするため調査を行った。

【方法】平成24年12月、看護補助者を配置している13病棟を対象に、業務の実施状況および看護師の負担軽減の程度についてアンケート調査を実施、前回平成23年6月の調査結果との比較を行った。

【結果】看護補助者の配置数は前回28名、今回69名であった。勤務は、前回は早出7病棟・遅出5病棟・休日は土曜日のみ9病棟、今回は早出11病棟・遅出12病棟・休日の土曜日は12病棟、日および祝日は11病棟であった。業務の中で、＜一人で実施＞の回答が高いのは、前回・今回共に「診療に関わる周辺業務」「環境の整備・リネンの交換」であった。前回に比較して高いのは、「報告」「電話・ナースコールの対応」で10病棟以上であった。前回低かった「排泄の世話」は3病棟から7病棟に増えた。看護師の負担軽減の効果は、勤務別では深夜勤・日勤・準夜勤いずれも11病棟以上、勤務日別でも土・日・祝日いずれも11病棟以上が肯定的回答であった。深夜勤および準夜勤は前回よりも高かった。その他、勤務条件に制約があるので休日に十分な配置ができない等の意見があった。

【結論】看護補助者の増員により、業務内容および勤務時間、勤務日が拡大され、看護師の負担軽減につながっている。派遣職員から臨時職員への移行を控えており、今後も看護補助者のやりがい支援・働く環境の整備をすすめ、さらなる看護補助業務の拡大、定着を図ることが課題である。

02-26

喫食率の改善にソフト食はどこまで寄与できるか

柏原赤十字病院 リハビリテーション技術課¹⁾、柏原赤十字病院 看護部²⁾、柏原赤十字病院 栄養課³⁾、日本赤十字広島看護大学 看護学部⁴⁾○^{えすと なおき}患戸 直樹¹⁾、関岡 益世²⁾、白井 貴子²⁾、若狭美智子²⁾、上野千絵子³⁾、真崎 直子⁴⁾、松原みゆき⁴⁾

【はじめに】

入院患者の多くに誤嚥性肺炎や低栄養・脱水や食思不振などが散見される。摂食嚥下障害を合併している患者に食事としてミキサー食や刻み食などを提供しているが、喫食率は低下していることが多い。一般にソフト食が喫食率を改善するとして注目されているが、入院患者に対しても喫食率が改善するのか、改善しないのであればその原因を調べるために本研究を行った。

【方法】

2013年3月～5月当院に入院しており、ミキサー食や刻み食を摂取している患者6名（うち状態悪化による途中離脱者3名）を対象とした。事前に患者及び家族に臨床研究のための書面による同意を得た。食事提供前に嚥下機能評価と認知機能評価（HDS-R）を実施した。使用するソフト食はイーエヌ大塚開発の「あいーと」とした。2週間の研究期間のうち病院食とソフト食を摂取する期間を分け、摂取量や患者の変化をビデオ撮影によって調べた。

【結果】

グラム換算での摂取量の変化をみると全体的にソフト食の期間中に低下した。摂取時間の変化をみるとソフト食の期間中に短縮した。推定摂取カロリーの変化をみるとソフト食の期間中に増加した患者は1名みられた。患者の反応をみるとソフト食の形状に好意を示す患者が1名みられたが、変化がみられなかった患者も2名みられた。

【まとめ】

喫食率低下がみられる患者に対してのソフト食提供にあたっては、入院環境や患者の全身状態を考慮にいれることの必要性が示唆された。施設でソフト食を摂取している高齢者と入院患者の違いを明確にしておくことが必要と考えられた。

02-28

看護補助業務従事者の仕事に対する意識調査

京都第一赤十字病院 看護部

○^{なかの れいこ}中野 玲子、出井まち子、岩坪 祥子、藤本 嘉子、安堂智香子、竹下 敦子、高久 雅美

【目的】急性期看護補助体制加算（25対1配置5割以上）要件や看護師確保が困難な状況もあり、7対1対象以外の部署にも看護補助業務を担う職員が増えている。今回看護補助業務の実態と看護補助者の仕事に対する思いや要望などを明らかにするため調査を行った。

【方法】平成24年12月、看護部所属で看護補助業務を行っている108名を対象に、看護部職員業務規程の看護補助業務の実施状況および仕事に対する思いなどについてアンケート調査を実施した。仕事に対する思い7項目は5段階評点でそれぞれの理由も問うた。その他、受講したい研修や心配・不安なことなどを問うた。

【結果】アンケート用紙は108名に配布、87部回収、回収率80.6%であった。看護補助業務実施内容や状況は職種により様々であるが、「健康管理に努めている」「接遇に充分留意している」「知り得た情報の秘密を守っている」という姿勢・態度は全員が肯定的回答であった。仕事に対する思いの肯定的回答の割合は、「現在の仕事はやりがいがある」83.1%、「仕事を通じて自分が成長していると感じる」67.5%、「周囲の役割期待にはよく応えている」49.4%、「対人関係は良好である」66.7%、「部署の協力体制はできている」76.3%、「この職場で働き続けたいと思う」65.1%であった。「仕事の内容が難しいと思う」は否定的回答が26.2%で難しいと思っていない方が高かった。

【結論】平成25年4月現在、看護補助業務を担う者は看護部職員全体の11.9%に及ぶ。今回の調査で、看護補助業務従事者は病院組織の一員として自覚・責任をもって役割を遂行しようとする思いが伺えた。今回の結果を研修企画や業務の拡大に活用し、働きやすい環境づくり、安全で質の高い看護の提供につなげていきたい。